

おもしろい小説を読んだけど、どうやってそのおもしろさを伝えていいかわからない——そんな経験はありませんか？「おもしろいよ」「読みやすいよ」までは言えるけれど、「どこが？」と言われると困ってしまう。

これは小説には限りません。おいしいものを食べたけど、「おいしいよ」以上のことが言えない。「どこが？」「どんなふうにな？」と訊かれると言葉に詰まってしまおう。私たちは日常生活の中で「おもしろい」「おいしい」「楽しい」、あるいは逆に「つまらない」「まずい」といった経験をたくさんしています。でも、いざそれを言葉にして誰かに説明しようとすると難しい。

どうしてでしょう。「おもしろさ」や「楽しさ」を伝えるのは、人間にとつてとても大事なことだと思えるのに、どうしてうまくいかないのか。

おそらく、うまく伝えられないデリケートで微妙なものだからこそ、貴重なものとして感じられるからではないでしょうか。どう処理していいかわからないからこそ、より深く私たちも感動する。たとえば「甘い」とか「明るい」とか「びっくりした」といったわかりやすい要素だけでは、私たちの心は動かない。いくつもの相反するよ

うな要素がブレンドされることで、はじめて「ほお」と感心する。

私はふだん、しかめっ面をして大学で「文学研究」なるものに打ち込んでいますが、元々そのきつかけとなったのは、おもしろいもの、不思議なもの、曰く言い難いものとお出会うまく説明できず、「これを何とか言葉にしたい……」と悩んだ経験にあります。もちろん、これは意味のある充実した「悩み」でした。

その延長の上に本書もあります。「どこがおもしろい？」と訊かれたら、文字通りその「どこ」に印をつけて示せばいいのではないかと。そうすることで、堅苦しく面倒くさそうな「名作」なるものの不思議さや変さを明るみにし、少しずつ「おもしろさ」や「楽しさ」の正体に迫れるのではないかと。そんなふうには考えてきました。

この「らくがき式」を使えば、書評や書店での本の見せ方も変えられるとも思っています。学校の授業で小説やエッセイや評論を読むとき、あるいは数学や理科の教科書を読むときにも応用できるでしょう。新聞記事やブログにだって、「らくがき」してもいいかもしれません。

本書では「小説とは何か？」「物語と小説の違いは？」「語るとはどういうことか？」といった問いも補助線として使いました。小説を楽しむだけならそんな理屈は関係な

さそうですが、読書の際に生ずるあいまいな感覚をつきとめて言葉にするにはこうした枠組は助けになります。そのあたり、もつと考えてみたいという人がいれば、本書でも紹介した何人かの「いじりの名手」の著作を手にとってみるのもいいでしょう。

この本の企画の際、潜在的に影響を受けたのは傳田光洋『皮膚感覚と人間のこころ』（講談社）、仲谷正史『触楽入門』（朝日出版社）という二つの本です。私はこのお二人の著書を通して、あらためて「触る」ということの持つ深い意味を知り、「名手」にも触ってしまおう！と思うに至りました。

ツイッターに流した本書のアイデアに迅速に反応してくれたのは立東舎の刃刀匠さん。一見、さわやかな刃刀さんですが、見かけによらずしぶとく、しつこく、私がさわやかに原稿の期限をごまかそうとしても執拗に催促を続けてくださいました。気がついたら本ができていた次第。すごい手腕です。ありがとうございました。

付録 「らくがき式」 練習シート

【使い方】

本文中に使用した「らくがき」用シートです。本書を参考に、自由に思ったことを書き込んでみてください。